

日本 ハンザキ研究所 ニュース 2007(7);通巻18号

発行 2007.07.31

〒679-3341兵庫県朝来市生野町黒川 292

TEL/FAX (079)679-2939

E-mail: J-hanken @ sasayuri-net.jp

日本ハンザキ研究所 橋本 武良

禁漁区の設定

平成19年6月から、旧・黒川小学校地に接する市川は禁漁区となりました。子供たちの環境学習の場として豊かな水生生物を観察できるようにと考えると、市川漁協の飛騨組合長さんをお願いしたのです。河川内に禁漁のサンクチュアリーが出来ると、ここで繁殖した生き物たちは禁漁区外へと溢れていくでしょう。河川全体にとっても良い影響が出ると期待できます。組合長さんは大変に理解のある方で、組合の総会でオオサンショウウオのためにそんな事をする必要は無いといった一部の意見を説得して決定して頂きました。

平成16年の大きな台風災害やダムからの低水温の長期放水などで川雑魚の姿が極端に減少していたのですが、今年は多くの稚魚（タカハヤ・・当地ではゴトンボと呼ぶ）が見られるようになってきました。子供会で参加した小学生たちにもたやすくすくい取ることができます。タカハヤだけでなく他の多くの水生動物が見られるようになれば、観察会で経験の無かった子供にも大きな自信を持たせることが出来るでしょう。

禁漁区の看板は当方で出すことになりましたが、資金が有りません。手書きの張り紙を考えていたところ、ポンと看板代を出してくださる方があり、写真のように大きな看板を出すことが出来ました。谷下さん有り難うございました。余った資金で念願であった「ハンザキ研」の表札も作れそうです。このように多くの方々からの好意を受けてハンザキ研は少しずつですが整備が進んでいきます。

来月には3組の公民館活動や子供会グループの来所が予定されています。階段ができてアプローチの良くなった河原で豊かな水生動物と親しんで貰えることと期待しています。後は、多人数の団体の受け入れのために校舎のトイレの浄化槽が整備されればほぼ環境学習対応はできるようになります。県の補助を受けて手網と小バケツも30組そろいました。今後は、このポイントにおける生物種の記録や盛衰を観察していくことで河川環境の変化を追求することが出来るでしょう。ハンザキ研が存続するかぎりこの記録は残され長期に渡る河川生態系の自然誌を残していくことになります。目下ハンザキ橋の直下に30号は越える大物のアマゴが縄張りを持っています。ナイター照明に集まる昆虫を食食しているようです。

オオサンショウウオ“安口ルート”を求めて（8） — おわりに

NPO 法人 地域再生研究センター 会員 池上 優一
日本ハンザキ研究所 研究員

昔からオオサンショウウオの呼び名がどう変わってきたのかという観点で、長々と、文献や資料の引用を中心に書いてきました。結局、主題の”安口ルート”を探るところまではたどり着きませんでした。しかし、調べた結果、ハダカスあるいはハタカスというオオサンショウウオあるいは他の生き物の呼び名は、室町以前ひいては平安時代に遡る可能性もあることが解ってきました。従って、おそらくかなり専門的な調べ方をしない限り、詳細にせまるのは極めて困難であろうと思われれます。

調査途中で、兵庫県自然保護協会の大沼弘一氏と出会いました。氏も安口地名には大変興味を抱いておられ、現地調査を実施しながら、ハダカス方言の調査も進められており、貴重な情報を聞くことができました。今後も氏の協力をお願いしましたが、私自身、古典や方言さらには国語の専門分野に迫るのはなかなか大変なことと認識しています。

しかし、節用集や本草学に触れることによって、遠い過去と思っていた平安や室町時代がほんの少し前だったように思えてきました。特に食べていたものやその呼び名で、何ら変わらず連続と続いているものも沢山あることに感動しました。

生きた化石と言われるオオサンショウウオや小型のサンショウウオ科の種も農山村や山間部で生活する人々と深い係わりがあったでしょうし、壇の浦あるいはそれ以前に源氏に追われた平家の人たちもおそらく人里はなれた山奥に逃げ延びて生活をしたものと思われれます。そして、そのような場所は、オオサンショウウオの生活圏でもあったのでしょ。こう思っていると、夢とロマンが広がってくる気がします。

オオサンショウウオが夜行性であり、昼間はめったに見られないことから、現在では多産地であってもよく知っている人と全く知らない人に分かれます。もちろん、興味の有無にも関係すると思われれますが、昔は貴重なタンパク源として食べられていたでしょうし、多産地の人はほとんど知っていたものと思われれます。

聞き取りで調査では、昔は池で飼っていたり、井戸で飼っていたケースが多かったようです。特に井戸に飼っておくとカエルや他の生き物を食べてしまうのでいつも水がきれいになっているとか、産後の婦人に生き血を飲ませて健康増進に役立てたとかの話も聞けました。島根出身の方には、藁にまぶして焼いて皮を剥いで食べるという話も聞く事ができました。最近の新聞記事では中国では鍋物の高級食材であるという話もあります。仮にチャンスがあっても決して食べてみたいとは思いませんが・・・。

この一年余、この課題に取り組んで、奥の深さとともに昔からの勉強が何と役に立たなかったのか思い知らされました。このテーマ追求のためには、日本の民族的な分野を今後もっと知る必要があると痛感しました。それにしても、いろいろな方に資料の提供や貴重なお話を伺うことができ、ここまで調べられたことは幸いです。貴重なお話や資料は他にも沢山ありますが、紹介しきれないことは大変に残念ですが、またの機会にまとめたいと思っています。

これをお読みになった方で、お住まいの近くや出先などで、オオサンショウウオの方

言を聞かれた方、今後の調査に役立てたいので是非ご一報ください。

最後に、私の拙い内容に付き合ってください、監修いただいた栃本所長にお礼申し上げます、ひとまず終りにしたいと思います。長い間、大変有難うございました。（おわり）

引用文献

- 1 「続 日本の地名」谷川健一（1998）岩波新書
- 2 「ひょうごの地名再考」落合重信（1988）神戸新聞総合出版センター
- 3 「ひょうごの地名」吉田茂樹（1983）神戸新聞総合出版センター
- 4 「大山椒魚」小原二郎（1985）懶どうぶつ社
- 5 「かくれ里と山椒魚」石田鉄雄（1975）新潮社
- 6 「イモリと山椒魚の博物誌」碓井益雄（1993）工作舎
- 7 「日本ハンザキ集覧」生駒義博（1973）津山科学教育博物館
- 8 「日本博物誌」上野益三（1973）平凡社
- 9 「日本国語大辞典」第1巻、第8巻 小学館
- 10 「改訂 総合日本民俗語彙」第3巻 平凡社（柳田國男監修 民俗学研究所編）
- 11 「英田郡史 全」大正12年
- 12 「国語と国文学」『漢語研究上の一問題 -鯰をめぐって-』山田俊雄（1953）
- 13 「日本方言研究会」第53回 研究発表会原稿集 5)『ハンザキ・鯰の語誌
—大山椒魚という動物の呼び名を考える—』虫明吉次郎（1991）
- 14 「九頭竜川流域誌」（2001）国土交通省福井河川事務所
- 15 「東作誌」（1815）
- 16 「多紀郷土史考」奥田楽々斎（1958）
- 17 「丹波の生物」篠山農業高等学校教諭 樋口繁一（昭和28年1月）
- 18 「郷土辞典」篠山尋常高等小学校郷土教育研究会発行（昭和11年7月）
- 19 「丹波・安口村名の起り」（樋口繁一）
『兵庫県博物学会誌』第15号（昭和13年6月刊）
- 20 「日本方言大辞典 下巻（小学館）」
- 21 「地名語源辞典（校倉書房）」
- 22 「日本歴史地名大系 29—兵庫県の地名 I（平凡社）」
- 23 「兵庫県地名辞典」（角川書店）
- 24 「ハンザキ（鯰魚）調査報告書」石川千代松（1903）
- 25 「岡山県下に産する特殊動物並びに該動物に関する研究論文目録」（岡山県編集）
- 26 「日本産爬虫類両生類の和名の変遷と現状」（足田 努、千石正一）
爬虫両棲類学会報（2000）（1）
- 27 「オオサンショウウオの研究 IX —用語について（1）—（栃本武良）」（1996）
- 28 「本草和名」深江輔仁（981）
- 29 「倭名類聚抄」源 順（931）
- 30 「類聚名義抄」伴 信友（平安末）
- 31 「色葉字類抄」橘 忠兼（平安末）
- 32 「温故知新書」（室町期）
- 33 「黒本本節用集」（室町初期）
- 34 「正宗本節用集」（室町初期）
- 35 「（家伝）日用本草」（室町期）
- 36 「節用集」（室町中期）
- 37 「和玉篇」（室町中期）
- 38 「塵芥」（室町後期）
- 39 「運歩色葉集」（戦国期）
- 40 「天正十八年節用集」（戦国期）
- 41 「易林訂正節用集」（戦国期）
- 42 「伊京集」（戦国期）
- 43 「新刊多識編」林 羅山（江戸初期）
- 44 「増補下学集」（江戸期）
- 45 「食物本草」（江戸期）
- 46 「日用食性」曲直瀬玄朔（1633）
- 47 「和爾雅」（江戸期）
- 48 「本朝食鑑」人見必大（1697）
- 49 「和語本草綱目」（江戸期）
- 50 「大和本草」貝原益軒（1709）
- 51 「和漢三才図会」寺島良安（1712）
- 52 「食物本草大成」上野益三監修
「宜禁本草集要歌」（江戸初期）
「庖厨備用倭名本草」（江戸期）
- 53 「志不可起」（1727）
- 54 「節用集」橋本常亮（江戸期）
- 55 「本草綱目啓蒙」小野蘭山（1802）

「すずかけ」ってグッド・アイデア！

“鈴掛け”の並木のイメージでしょうか、この名を初めて聞いた時にこれはいいぞ！と即座に私の胸に響きました。共和コンクリート株式会社の本田さんは、なんと私の？十年も後輩の東京水産大学（現・東京海洋大学）の出身だと聞いてビックリしました。生物を専攻した人がコンクリート会社に就職していると言うことに驚いたのです。でも、驚くことは無いので、故・丸山為蔵さんはれっきとした水産庁の淡水区水産研究所の研究者（現・天皇陛下が米国から頂いたブルーギルの研究などで知られている・・・現在、各地で帰化魚として広まったのは別のルート）だったのですが、同社に再就職して“香住巢”（かすみそう）とこれ又優雅なネーミングのオオサンショウウオの人工巣穴の開発者でもあったのです。姫路市立水族館の初期にはトラックで東京都日野市の研究所まで行ってブルーギルの稚魚を分けて頂き、また新幹線で丸山さんが運んでくれた魚を姫路駅で受け取ったりした事があったのです。その後オオサンショウウオの縁で再会することがありました。

「すずかけ」という製品は自然石に孔を開けボルトで止めて、それをワイヤーで鎖に繋ぎ、河川横断工作物として水生生物を困らせている垂直のコンクリート壁（堰）に取り付けるだけで遡上を可能にするアイデアだったのです。現場での作業も簡易なもので無数に存在する関所を突破させるアイデア商品として大いに推薦します。

（連絡先：03-5940-3565 共和コンクリート工業株式会社技術開発部・本田隆秀さん）

「マザーズ・ロック」もグーだ！

“母なる岩”ということでしょうか？、初めて現物に出会ったのは市川水系恒屋川における兵庫県土木の多自然型護岸実験区域でした。この実験は多自然型と言いながら岸辺に植物が全く配慮されていないことから実施されたようでした。その委員会に何故か私が途中から参加を要請されたのです。不審に思いつつもそのタイトルに引かれるところがあってまずは現地地視察をさせていただいたのですが驚きました。護岸がまるで公園の花壇の様な状況になっていたのです。最大の問題点は水際のラインがコンクリートでシャッターアウトされていることで、動物の避難場所が無くなっていたことです。私が呼ばれた理由が分かりました。

しかし、その中で私の胸を強く打つ製品があったのです。それが株式会社ホクコンの当ブロックだったのです。川岸に植樹を提案しても、土木の皆さんは根がコンクリートを割ってしまうので、出来ませんとしか答えてくれなかったのです。それをこのブロックは見事に解決し、さらに1か月間も雨が無くとも大丈夫なように水タンクを備えていると言うことでした。島根県浜田土木の八戸川の工事は十数程の高さの護岸にこれを採用しています。岸辺の多孔質と植栽の重要性を訴えた私の意見に答えていただいたものです。今では護岸のコンクリートを覆い尽くすほどの木々が育っています。

（連絡先：06-6380-3641 株式会社ホクコン技術本部・田中義人さん）



写真1 出石川の工事 (穴開きブロックと植物)



写真2 出石川の工事 ハンザキ・マンション?



写真3 2か所に禁漁区の看板を



写真4 日工専の実習で魚道に繁ったヤナギ (揖保川)



写真5 すずかけ



写真6 マザーズ・ロックの給水タンク

ハンザキ研日誌 2007年7月

- 1日：姫路市立水族館・清水邦一氏水産漁港課へ異動の由
2日：出石川の河川工事現場視察（豊岡土木事務所・中村課長他3名）
4日：神戸動植物環境専門学校生徒など20名来所・レクチャー
5日：ラジオ関西「谷五郎アフタヌーン」電話出演
6日：豊岡市出石総合支所にて「出石川オオサンショウウオ対策検討委員会」
7日：ABC・TV取材に来所（9日放映）
9日：新名神道路建設・事前レク（西日本道路公団4名来所）
10日：兵庫県八鹿土木事務所長他3名来所・25日の竹原野地区委員会の打ち合わせ
：午後あこバスで帰姫（火・金2便のバスで前日に予約が必要）
12日：大阪府安威川ダム建設委員会・材料採取部会出席
13日：GS-242 午後あこバスで来所
：ウエスコ設計チーム3名来所、プールの改修案作成
20日：兵庫県文化財保護審議会・於兵庫県公館
21日：日本工科専門学校生・姫路市伊勢の里環境学習センター・揖保川の3井堰の魚道見学
24日：禁漁区の看板設置・谷下秀洋さんのカンパです。有り難うございました。
25日：市川（竹原野区）オオサンショウウオ対策委員会で旧・黒川小学校のプールがオオサンショウウオの保護収容施設として提案される。
：黒川地域活性化協議会、当所で開催
31日：岡山県真庭市よりハンザキ・シンポジウムの打ち合わせに来所
今月は3回23日の出勤？と146人の利用がありました。

ハンザキ所長のツブヤ記録

私は新し物好きだ。常により新しく改良の案が組み込まれているとすぐに飛びついてしまう。ホッチキスさんが発明したホチキスは便利だが止めた部分が嵩張って書類の整理に困る。細工用の小型ペンチで潰してファイルしていたが、フラット・クリンチという便利な製品が出てきた。困っていたのは私だけではなかったと早速手に入れたが当初は馬鹿にされていた。今では主流であると思うが・・・

これまでに、はんざきブロックの紹介をしてきたが、今回はさらに2社のアイディア賞（商）品を紹介した。いい物はいいのだと考えて推薦しているが、やはり大切なのは現場における追跡調査だと思う。コンクリートや河川工事などでは全くの素人である私でも現物を見ながら改良のアドバイスは可能だ。より良い製品を河川に使ってほしい、河川生物のためにもそうしたいと考えているだけだが、自分自身の楽しみでもある。